博士（文　学）　山　越　康　裕

学位論文題名

シネヘン・ブリヤート語の語形成

学位論文内容の要旨

1) 本論文の観点と方法

本論文は、モンゴル系のシネヘン・ブリヤート語について、5年間にわたる現地調査で得られた資料をもとに、語形成の観点から分析し記述したものである。具体的には、シネヘン・ブリヤート語の語形成の各手法について、それぞれの生産性や特徴のほか、「語」の単位のとらえ方、統合度や緊密性などの諸問題について、類型論的パラメータを用いて網羅的に分析・考察する。そして、モンゴル諸語の語形成として認識されている各手法によって形成された「語」が、類型論的観点からどの程度「語」として認められるのかを明らかにする。その上で、シネヘン・ブリヤート語における「語」とはどのような単位であるのかについて論じている。あわせて、従来、記述が皆無に等しいシネヘン・ブリヤート語の文法概略を付録として付している。

本論文は、現地で得た一次資料を記述言語学のオーソドックスな手法によって分析し、記述するのみならず、他のモンゴル諸語に対する先行研究を批判的にふまえ、モンゴル諸語研究に寄与しようとするものである。また「語」という単位をめぐる理論的・類型論的研究をも視野に入れ、一般言語学や言語類型論に対しても、「アルタイ型」語形成の一つの類型を提示している点に特色がある。

2) 本論文の内容

本論文はA4版約260ページ（400字詰め原稿用紙換算約880枚）からなり、「序文」に続く6つの章と、全体を受けての「結論」、および「付録」から構成されている。

「序文」において、問題の所在と論文の構成を示し、さらに「はじめに」として本論文で対象とする語形成手段の範囲を明確にしている。

第1章「〈語〉の定義」では、シネヘン・ブリヤート語の「語」をまず定義する。モンゴル諸語においてこれまで particle（小詞、小辞）とされてきた、語と接尾辞の中間的存在である形式に焦点をあて、シネヘン・ブリヤート語の「語」（自立語、倚辞）と接尾辞の境界を規定する。従来、モンゴル諸語研究において、「語」に対して明確な定義を与えた研究は見あたらない。特に自立語と語尾・接尾辞との中間的な存在といえる particle については、各研究者によって扱いが異なっていた。こうした現状をふまえて、類型論的パラメータをもとにシネヘン・ブリヤート語の非自立形式の再分類を行い、どのような形式を「語」と見るべきかという見解が示されている。

続いて第2章以降、語形成に関する「各論」に入る。著者によれば、従来のモンゴル諸語研究における語形成に関する研究は、基本的に要素の羅列に終始しており、伝統的・規

範的文法研究の域を出ないという。さらに通時態・共時態の区別が明確でない場合が多く、共時的にどの程度生産性が高いのか、また実際に使用されている形式なのか、という点に関しても記述が不十分であった。こうした現状への批判として、特にいくつかのトピックについては記述的・類型論的な方法論をもとに分析・考察し、今後のモンゴル諸語研究への方法論の提示を試みている。そうした目論見のもとに、第２章「派生」ではシネヘン・ブリヤート語の派生法に関して扱っている。おもに変化詞を派生する接尾辞の一覧と、それらの機能、用法について記述している。

続いて第３章「モンゴル語の複数接尾辞と名詞句階層」では、語形成の手段とその意味分析の方法への試論として、モンゴル諸語の名詞の複数表現についてとりあげ、接尾辞の意味・機能について論じる。この章では、シネヘン・ブリヤート語と比べて類型論的に、より興味深い特徴を有するモンゴル語ハルハ方言を分析の対象としている。「数」の範疇は、「アルタイ型」言語においては、「派生」に関わるものととらえられる。そこで派生接尾辞の意味分析への試論として、「複数」を意味する数種の接尾辞の意味・機能および選択制限について分析・考察する。その結果、複数接尾辞の意味、選択制限、義務性などに、言語普遍的傾向である名詞の有生性による階層性がかかわっていることを論じ、意味分析における類型論的な分析方法の導入が有効であることを述べている。

第４章「複合語の定義」では、シネヘン・ブリヤート語の複合語の定義を行う。モンゴル諸語研究においては、「語」の定義同様、「複合語」についても明確な定義がなかった。これまで複合語とされてきた形式がどのような特徴を有するのか、音韻面、形態・統語面の双方からの検証をもとに、あらためてシネヘン・ブリヤート語の複合語の定義を試みている。

第５章「複合形式の生産性と諸特徴」では第４章の定義に基づき、シネヘン・ブリヤート語の複合形式を構成要素別に分析し、それらの「語」としての資格や意味、機能面での諸特徴について論じる。音韻面、形態面双方からの分析をおこない、その結果、これまで「複合語」と見られていた形式の多くが、実際にはよりゆるやかな結合であることを述べる。その根拠として、音韻的には構成要素がそれぞれ独立したかたちで複合体をなしている例が多いことに注目し、実際に複合語として認められる形式は非常に少ないとしている。

第６章「その他の語形成法」では、シネヘン・ブリヤート語の派生法、複合法を除くそのほかの語形成法である、重複や音交替、借用について、それらの生産性や機能について概観している。

以上の考察を総合し、さらにシネヘン・ブリヤート語の語形成に影響を与えていると考えられる外的要因について触れつつ、「結論」をまとめている。シネヘン・ブリヤート語における語形成法は、実際には派生法を除くと、ほとんどが類型論的観点からは「語」形成というよりは「複合体」形成とでもいうべきカテゴリーに属するとする。日本語と同じアルタイ型に属していながら異なるふるまいをみせる要因として、近隣言語との接触の影響や、地理類型とも推測される特徴が確認されることについても補足的にふれている。

本論文にはさらに付録として「シネヘン・ブリヤート語概略」が付されている。本論文の対象であるシネヘン・ブリヤート語は、移住者の言語として近隣のモンゴル語諸方言、もしくは漢語（中国語）の影響を受け、特に若い世代ではモンゴル語、漢語を主とした言語生活へと近年急速に移行しつつある点で、いわゆる「危機言語」と見なすことができる。しかも先行記述は皆無に等しい状況であり、こうした点でこの文法概略は、本論文を補完するのみならず、今後早急に必要となる当該言語の記述研究にとって基礎となるものであるといえる。

学位論文審査の要旨

主　査　　教　授　　津　曲　敏　郎

副　査　　教　授　　煎　本　　孝

副　査　　教　授　　門　脇　誠　一

学 位 論 文 題 名

シネヘン・ブリヤート語の語形成

1) 審査日程

本論文の審査は次のような日程で行われた。

平成 16 年 12 月 17 日　審査委員会発足
平成 16 年 12 月 20 日　第 1 回審査委員会：論文配布、審査日程の調整
平成 17 年 1 月 12 日　第 2 回審査委員会：口述試験実施、試問結果の検討
平成 17 年 1 月 24 日　第 3 回審査委員会：口述試験（第 2 回）実施、修正点の確認
平成 17 年 1 月 24 日　第 4 回審査委員会：学位授与の判定、報告書原案の作成・検討
平成 17 年 1 月 26 日　第 5 回審査委員会：報告書の作成・確認
平成 17 年 1 月 27 日　審査結果報告書の提出
平成 17 年 2 月 4 日　研究科教授会において審査報告
平成 17 年 2 月 11 日　研究科教授会において審査、学位授与承認

2) 審査経過概要

第 2 回審査委員会において、論文提出者から論文内容の概要について説明を受けた後、各審査委員から質疑がなされた。これにより、本論文の論点がいっそう明確になり、全体として構成・内容とも高い水準にあることが確認された。ただし若干の軽微な不備が指摘されたが、次回審査委員会までに追加・修正が十分可能であるとみて、提出者に改善を求めた。その結果は第 3 回審査委員会で本人の補足説明とともに示され、これを受けて第 4 回委員会において、学位授与可との判定に至った。そこで主査を中心に審査報告書の作成に取りかかり、第 5 回委員会において、報告書内容の検討と確認を行った。

3) 本論文の研究成果

審査委員の見解を総合すると、本論文の成果および評価できる点は次のようにまとめられる。

1. モンゴル諸語研究において、従来、検証が不十分であった「語形成」および「語の単位」の問題を正面からとりあげ、その全体像を客観的基準によって明らかにした点。

2. アルタイ型語形成の一つの類型を提示し、言語類型論に寄与しうるデータと分析方法を示した点。

3. 移住と他言語の影響による借用や語形成パターンの変化など、言語変化の動態論的側面に貴重な実例を提示した点。

4. 危機言語であるシネヘン・ブリヤート語を現地調査によりデータ収集・分析し、語形成の問題にとどまらず、音韻・文法の全体像を記述した点。

4) 学位授与に関する委員会の所見

審査の過程において、データの分析と解釈や文章表現に関していくつかの改善すべき点が見出されるとともに、章によって多少精度にバラツキが見られること（たとえば派生を扱った第２章では接辞の意味記述が概略的に過ぎる点など）も指摘された。しかし細かな誤りは十分修正可能な範囲であり、後者の問題にしても、未知のフィールドで一から取り組んだことを考慮すると、むしろ今後の研究発展への基礎固めとしてとらえるべき部分であると認識される。全体として本論文は、独自のデータと手堅い分析手法で貫かれており、理論と記述の両面できわめて高い水準にあると判断される。

こうした点で、審査委員会は、本論文が博士（文学）を授与するに十分値する学問的価値を有するものと、全員一致して認めるに至った。